

博士論文

明治政府の対外美術戦略に関する研究
—1910年日英博覧会をめぐって

平成28年度

筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻

林 みちこ

筑波大学

目次

序章	・・・ 1
第1節 本研究の目的	
第2節 日英博覧会の目的と概要	
第3節 日英博覧会の研究史	
第4節 対外美術戦略の研究史	
第5節 日英博覧会をめぐる問題の所在と本研究の構成	
第1章 日英博覧会開催の背景	・・・ 25
第1節 日英博覧会開催までの経緯—幻の万博「日本大博覧会」をめぐる	
第2節 明治政府の対外イメージ戦略と日英博覧会	
第3節 キラルフィーによる「博覧会会社」と日本事務局	
第4節 日本の事務局と出品—『官報』にみる事務局の機構と参加の意図	
第2章 日英博覧会と内務省—国宝出品と古社寺保存会	・・・ 51
第1節 博覧会と各省庁の業務：内務省と農商務省	
第2節 博覧会と各省庁の業務：外務省と文部省	
第3節 内務省の成立と解体	
第4節 内務省の研究史	
第5節 1910年（明治43）前後の内務省：藩閥官僚から学士官僚へ	
第6節 日英博覧会における内務省の役割：文化財保護：国宝出品と 「古社寺保存会」における議論	
第7節 日英博覧会における内務省の役割：『特別保護建造物及国宝帖』 出版をめぐる	
第8節 官庁のセクショナリズムと明治の美術行政	
第9節 日英博覧会における各省庁の分掌と博覧会の開催意義	

第3章 日英博覧会における国宝の出品と『特別保護建造物及国宝帖』・・・80

—「官製日本美術史」の形成

- 第1節 「官製日本美術史」のプレゼンテーションとしての日英博覧会
- 第2節 日英博覧会における美術出品の概要と美術に関する出版物
- 第3節 国宝出品をめぐる議論：文化財保護と外交のあいだで
- 第4節 国宝をはじめとする美術作品の展示方法とその反響
- 第5節 『特別保護建造物及国宝帖』（1910年）について
- 第6節 二つの「官製日本美術史」—『稿本日本帝国美術略史』（1900年）と『国宝帖』（1910年）にみる日本美術史観

第4章 文部省美術展覧会と日英博覧会：新美術の出品をめぐる・・・121

- 第1節 美術部出品における「新美術」の位置づけと「日本画」「西洋画」の区分
- 第2節 鑑査の経緯—文部省美術展覧会（文展）との関わり
- 第3節 画題ごとにみる近代絵画の出品状況と評価：(a) 風景画
- 第4節 画題ごとにみる近代絵画の出品状況と評価：(b) 人物・風俗画
- 第5節 画題ごとにみる近代絵画の出品状況と評価：(c) 花鳥画
- 第6節 画題ごとにみる近代絵画の出品状況と評価：(d) 歴史画
- 第7節 イギリス側の美術出品

第5章 日英博覧会と「やまとひめ」・・・161

—日本を表象する女神像の誕生とその背景

- 第1節 「やまとひめ」に関する先行研究について
- 第2節 ①日本人の創り出した「やまとひめ」について—北澤楽天による『時事新報』挿図および附録
- 第3節 条約改正と著作権法
- 第4節 「やまとひめ」の起源—最初の斎王としての倭姫命と伊勢神宮の創設

第5節 「やまとひめ」の図像的典拠と菊池容斎『前賢故実』— 特に髪型について

第6節 明治政府による国家神道の確立と「やまとひめ」像との関連

第7節 ②海外で図案化された「日本を表象する女神像」— 日英博賞状の図像
分析と、ブリタニアに関する考察

第8節 「古代」を必要とした明治政府と日英博覧会

第6章 日英博覧会の両義性 ・・・187

—国家的ページェントと見世物興行のあいだで

第1節 ジオラマで見せた日本の「歴史」

第2節 期待されたジャポニスム：桑原羊次郎の肉筆浮世絵コレクション

第3節 「日本余興」におけるフェア・ジャパン（美的日本）とポエティック・ジャパン（詩的
日本）

第4節 コロニアリズムの表出—植民地村の「展示」

終章 本研究の総括と今後の課題 ・・・224

第1節 日英博覧会の評価—博覧会終了後の帝国議会における論争

第2節 日英博覧会が残したもの—美術史家の回想から

第3節 まとめ—対外美術戦略における日英博の意義

第4節 今後の課題

主要参考文献 ・・・241

図版一覧 ・・・253

【資料編】別冊

1. 図版：本文中の挿図 ・・・ 1

2. 図版：古美術 国宝 ・・・60

3. 図版：新美術 日本画、西洋画 ・・・87

The Art Policy of Imperial Japan During Meiji Period and Its Strategic Expansion Abroad:
A Reevaluation of The Japan-British Exhibition, 1910

【論文概要】

本研究は、1910年にロンドンで開催された日英博覧会（Japan-British Exhibition）〔以下、日英博と表記〕の美術部門の出品を、明治政府の外交政策を中心とする政治社会的な諸動向と関係づけながら分析し、その結果をもって万国博覧会史上において日英博を再評価することを目的としている。

まず第一に日英博が成功したかという評価の問題である。入場者数、新聞での批評だけを見ると成功と見なすことができるが、一方で歴史学の分野では失敗であったと総括するむきもある。その理由として、日本側は政府主導で事務局の体制が整備されたにも関わらず、受入側のイギリスでは政府が介入せず一企業としての興行会社が事務局を担ったことが挙げられる。この体制の差から、日英博を国家間のイベントととらえず一企業に誘致され明治政府が出展した単なるフェスティバルと捉える研究者が多かったのである。また、来場者数、メディアの反響等も他の万博に対して遜色のないものであったにも関わらず、日英二国間の博覧会であり、あくまで万博ではないという組織上の問題も相まって日英博がその後の博覧会史に掲載されなかったことから、時代を経てこの国家的ページェントは忘れ去られていった。

次に国宝出品に関する問題であるが、日本が参加した万博の研究においては、たとえば1900年（明治33）パリ万博などの研究と比べると、二国間の博覧会であった日英博はほとんど看過されている。しかし国宝の出品という観点では日英博は1900年パリ万博を凌ぐレベルであり門外不出の国宝を海外に送り出した唯一の機会であったので、欧州のジャポニスムに与えたインパクトは顕著なものであった。

日本の近代国家成立の過程で、万博は国家的ページェント（祝祭）として国力の顕示の場となった。しかし万博は数多くの国の祭典であり、日本は参加国のひとつのパヴィリオンを占めるに過ぎなかった。日英博は万国博覧会全盛の時代においては異例の日英二国間の博覧

会であり、実質的にはロンドンで行われた日本博すなわちジャパン・フェアであった。ゆえに万博における出展を見るよりも、近代国家としての自意識をアピールしようとした政府の意図が、より強く確認できるのが二国間の博覧会としての日英博であると言える。よって、芸術学・美術史学の方法論により日英博における国家意識の表出を考察することは、明治後期における美術とその他の視覚イメージを利用したナショナル・アイデンティティの様相を知る最も大きな手がかりとなると考えられ、それは本稿の意義を裏付けるものである。

本稿においては特に、明治維新以降に日本政府が推し進めた美術の制度化が明治末期の日英博においてひとつのまとまりをなし、美術を通して近代国家日本を表象したという事実を明確にしたいと考える。国家的ページェントとしての日英博の実相を示すために、以下の論点について各章で考察した。

第1章 日英博覧会開催の背景

日英博が開催された背景について考察した。日本初の万国博覧会としての「日本大博覧会」の中止が大きな要因のひとつである。その中止に際しては、日露戦争後の緊縮財政のなかで首都での万博を強行するのか、あるいは地方を活性化するのかという二者択一を迫られた政府が地方の開発を選んだという内政上の判断があった。この時すでに駐英大使が日英博の開催をイギリス側と約束していたため、同じく巨額の費用を要する日英同盟の強化を目的として日英博は開催される方向で進んだのであった。そしてイギリス側の事務局は民間会社が担い、国家間の博覧会というよりも日本政府が民間会社に招致された祝祭として日英博は組織されることとなった。負担する経費も日本政府の拠出が多く、国内では批判も起こった。

第2章 日英博覧会と内務省—国宝出品と古社寺保存会

日英博に内務省が深く関わっていたことを検証した。明治維新後の内外の博覧会はもともと殖産興業を目標としていたものであり農商務省の管轄であったが、日英博の頃になると国家統合の象徴として機能するようになり内務省の関与が強まった。また内務省は古社寺の保

護とその宝物の保護を通して、国の歴史と宗教を管理するようになっていく。この章においては、博覧会行政における官庁のセクショナリズムを指摘するとともに、内政と外交の両面から明治最晩年の日英博が大きな意味を持つことを改めて確認できた。

第3章 日英博覧会における国宝の出品と『特別保護建造物及国宝帖』

—「官製日本美術史」の形成

日英博における国宝出品と日英両言語で出版された『特別保護建造物及国宝帖』について考察した。日英博の最大の見どころとなった日本美術については古代重視の作品選定および出版があった。国宝出品に関しては、貴重な文化遺産の海外への輸送に対して古社寺保存会が難色を示したことにより海外貸出の是非が議論されたが、結果として外交上の理由から断行された。この議論を通して、明治期の対外美術戦略に国宝が利用された事実が明らかになり、また、こうした議論を契機として文化財保護への意識が高まり、作品に随行した博物館員が展示と保存の両立に苦心したことも分かった。そして出品された美術品は、ジャポニスムの成熟期を過ぎたヨーロッパにおいて、ただ楽しむだけではなく日本美術を体系的に学び始めた観衆の期待に応えるものとなった。さらに『国宝帖』については、岡倉覚三（天心）の日本美術史観が色濃く表れた第二の官製日本美術史であることが改めて明らかとなった。

第4章 文部省美術展覧会と日英博覧会：新美術の出品をめぐる

日英博の新美術出品について、日本画・西洋画の鑑査状況と出品作品、および現地、日本国内での批評を分析した。それにより、鑑査に文展が大きく関与していることを解明し、日本のサロンを作ろうとした明治政府の国内美術行政の一環としての文展創設が日英博の鑑査に役立ち、文展もまた対外美術戦略の一翼を担っていたことを証明した。

第5章 日英博覧会と「やまとひめ」—日本を表象する女神像の誕生とその背景

日英博の賞状に描かれた日英両国を象徴する女神像の解析を通し、日本を表象するやまと

ひめ図像の源泉をたどった。この考察により、日本が自国のシンボルとして女神像を必要としていたこと、その誕生については伊勢神宮を中心とする国家神道の成立と密接に関わっていること、さらには、欧米列強と対等であることを示すために、日本が古代から連綿と続く歴史を持つ一等国であることをアピールする、という日英博のねらいがその裏にあることを証明した。

第6章 日英博覧会の両義性—国家的ページェントと見世物興行のあいだで

日英博が明治政府の美術行政や対外美術戦略の一環として最新の美術の動向や国宝など一級の美術品を提示する一方で、江戸文化を未だ残す明治期の見世物文化をイギリスで披露し、エキゾチックな日本像を求めていた観衆の期待に応えたことを明らかにした。具体的には日本の歴史を立体的に見せるジオラマ、そして日本村である。さらに帝国主義の祭典としてホワイトシティでの博覧会に求められていた植民地展示についても振り返り、人道上の問題を含みながらも1910年の世界情勢を表わすものと位置づけた。

以上の考察を踏まえて本稿の結論をまとめるならば、日英博は日英同盟に付随する日英の友好関係の強化を目的として外交上企図されたものであり、加えて対英貿易の不均衡すなわち輸入超過、輸出僅少を改善すべく、国産品の販売促進も意図していた。さらに開催にあたっては中止された万博、日本大博覧会の代替イベントという役割も担っていたので、二国間の博覧会と言っても意気込みは万博への参加に匹敵するものであった。しかしながら日露戦争後の財政緊縮の時期に巨額を投じたこと、相手国のイギリスは政府主導ではなく民間会社が運営を行っていたことから日本に不利な営利事業と見做され、帝国議会で議論の的となった。

実質的にロンドンでの日本博、現在のジャパン・フェアの先駆けのようなイベントとなった日英博において、明治政府は最大限にその場を活用しようとした。その到達点を、帝国日本を欧米列強と対等な国家として認めさせることと設定し、展示においては日本が古代から

連綿と続く歴史と文化を持つ一等国であることを示すために門外不出の国宝をイギリスまで運んだ。『国宝帖』の日英同時出版によって、東アジア美術史のなかに日本を位置づけるという岡倉覚三（天心）の思想にもとづき官製日本美術史を内外に発表した。また神武天皇から始まる歴史をジオラマとして立体的に展示し、博覧会のアイコンとして日本を象徴する女神像を古代神話にもとづいて創出するなど、美術出品以外の分野でも日本のナショナル・アイデンティティが表象されることとなった。すなわち日英博は帝国日本の自意識の発露であり、ナショナリズムの視覚化を通じた日本の対外イメージ戦略のさまざまな形態がみられる場であった。その戦略には外務省、そして博覧会行政を担う農商務省のみならず、内政の総てを掌握していた内務省、さらに文部省も関与していた。特に内務省については、国家神道の確立という大命題を抱えていた時期であり、古社寺の保存、国宝をはじめとする文化財の保護という美術の管理も含め、内務官僚による美術行政への関与がみられた。

そして最後に付け加えるべきこととして、日英博は帝国日本の国家的ページェントであったが、その一方で江戸趣味を残す明治の見世物文化も共存しており、西欧のジャポニズムに見合った、日本愛好の観衆の期待に応えるエキゾチックな日本像を提示した。それは明治政府が目指した方向に逆行するものであったが、むしろその両義性がイギリスの観衆の眼を喜ばせたとも言えるのである。